

ジュートの故地とその移動の軌跡について： 中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的 背景(2)

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

185

(終了ページ / End Page)

203

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003252>

ジュートの故地とその移動の軌跡について —中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(2)—

法政大学キャリアデザイン学部教授 岩谷道夫

(一)

西暦5世紀の中頃、ブリテン島を目指して大陸から移動したアングル、サクソン、ジュート、フリージアのゲルマン人諸部族のうち、ジュートは、後にケント王国を作り、アングロ・サクソン七王国のうち、最も初期に隆盛の時期を見出したゲルマン人として知られている。そのジュートによるケント王国は、ブリテンにおける支配権に関して、アングルによって作られたノーサンブリア王国に、取って代わられることになる。ところで、もともとジュートは、ブリテン島移住以前に、ユトランドに居住していたと推測されるが、それについては異説もあり、大陸の時代に、フランクと親しい関係にあったという指摘もある。また、ジュートのフリージアンとの親近性も、文献的に追求され得る。そのように、ジュートについては、その故地と居住地域について、様々な問題点が内包されているのであるが、本稿では、特に、カエサルの『ガリア戦記』に現われるエウドゥスイー、そして、タキトゥスの『ゲルマーニア』に現われるエウドセースとの関連を中心に、『ウィードスイース』『ペーオウルフ』、その他の文献の中の、ジュートと関連するゲルマン人部族にも触れながら、研究者の様々な見解を通して、ジュートの実体、とりわけその大陸における故地と移動の軌跡について考えてみたい。

(二)

まず、英国の歴史家ベータによる、8世紀の『英国民教会史』の中に見出されるジュートについての記述を確認することにしたい。ベータは、ブリテン島

に移住したゲルマン人部族のアングルによって建国された、ノーサンブリア王国の歴史家であり、その『英国民教会史』には、ブリテン島におけるゲルマン人の側からの、英国を作ったゲルマン人諸部族の故地と移住についての、具体的な言及がなされているので、諸々の研究者は、ジュートについて述べる際に、見解を異にしながらも、必ずそのベータによる記述を、論述の出発点としているからである。しばしば引用されるものであるが、ベータの、ジュートについての当該部分を含む記述は、次のようなものである¹⁾。

さて、彼らはゲルマーニアの有力な三つの部族、即ちサクソン、アングル、ジュートの地より来たのであった。ケントの人々（カントウワーリー）、およびワイト島の人々（ウィクトウアリー）、即ち、ワイト島を保持している人々と、ワイト島の対岸にあって、今日までウェスト・サクソンの地でジュートと呼ばれている人々は、ジュート起源である。サクソン、即ち現在、古サクソンと呼ばれている人々の地域からは、イースト・サクソン、サウス・サクソン、ウェスト・サクソンの人々が来ている。アングル、即ち、アンゲルンと呼ばれ、ジュートとサクソンの間にあって、その頃から今日に至るまで、ほとんど無人の状態のままと言われている地域からは、イースト・アングリヤ、内陸のアングル、マーシア、そしてすべてのノーサンブリアの人々が、即ち、ハンバー川の北に住んでいる人々と、その他のアングルが来ている。

ベータは、ゲルマン民族の、アングル、サクソン、ジュートという三つの部族のブリテン島への移住について、そしてその各々の部族の故地について述べている。それによれば、ジュートの故地は、ユトランド半島のおそらく北部であり、アングルの居住地の北に隣接する地域となるであろう。従って、ベータの文章をもとに、ジュートがその地域から、ブリテン島のケントおよびワイト島へ移住したと考えられてきたのである。8世紀のベータによって記述されている、そのジュートについては、紀元前1世紀のローマのカエサル『ガリア戦記』、そして、西暦2世紀のタキトゥスの『ゲルマーニア』にも、関連すると思われる部族が言及されている。それでは、それらの文献において、

ジュートと関連すると思われるゲルマン人部族は、それぞれどのように言及されているであろうか。

カエサルの『ガリア戦記』には、エウドゥスイーEudusiiというゲルマン人部族についての記述が存在する⁽²⁾。そのエウドゥスイーは、マルコマンニーヤ、また、ハルーデース、トリボキー、ウァンギオネース、ネメーテース、等のスエービー系の諸部族とともに言及されている。それらのゲルマン人諸部族は、ライン川西岸の地域の支配権をめぐり、スエービーのアリオウイストスのもとでカエサルのローマ軍と戦う場面で登場している。そのライン川西岸地域の支配権をめぐる戦いで、それらのゲルマン人諸部族は、カエサルに敗北させられ、多くのゲルマン人は、ライン川の東岸に戻っていくことになる。そこで言及されているエウドゥスイーは、『ガリア戦記』によれば、ライン川中流域西岸に居住していたと思われるゲルマン人部族である。そのエウドゥスイーが、主に音韻の対応から、ジュートとの関連性を持つゲルマン人部族と考えられるのである。

一方、カエサルから150年ほど後のローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』にも、ジュートと関連していると思われる部族が登場している。タキトゥスの『ゲルマニア』には、次のような記述がある⁽³⁾。

その他に、レウディーグニー、さらにアウイオネース、そしてアングリー、ウァリーニー、エウドセース、スアリーネース、ヌイトーネースの各部族が、それぞれ川あるいは森に守られて居住している。……

上で、アングリー、ウァリーニーの次に、エウドセースEudosesというゲルマン人の部族名が登場している。そのエウドセースが、ジュートとの関連性を指摘されているゲルマン人である。

タキトゥスは、ゲルマン人諸部族のすべてについて、直接調査したわけではない。基本的に、直接的な体験による情報と間接的な情報を集大成して『ゲルマニア』を著わしたのである。しかしながら、ゲルマン人諸部族についての言及は極めて詳細であり、また説得力に富む記述が多い。エウドセースの場合は、ネルトゥス諸族として、他のいくつかの部族とともに列挙されているわけ

であるが、その他の部族の中に、アングリーが言及されている。そのアングリーとは、アングルのことであり、後にブリテン島に移住して、アングロ・サクソン七王国を作ったゲルマン諸部族の一つである。ブリテン島に移住した後のアングルは、ブリテン島の北部と中部に、ノーサンブリアとマーシアという、極めて有力な国家を作り、とりわけその前者からは、ベータ、アルクインという、ブリテン島と大陸を含め、中世初期の西欧を代表する知識人が現われた。そのアングルについて、タキトゥスは、特に重要な部族として言及しているわけではない。タキトゥスの時代、西暦2世紀には、アングルは、後のゲルマン民族の大移動の時代と比すれば、その部族の力は、潜在的なものとして存在し、明示的なものではなかったのであろう。しかしながら、ブリテン島において、英国史上特筆されるべき役割を果たしたアングルが、北海ゲルマン人、インガエウォーネス⁴⁾の中の諸部族の一つとして言及されていることの意義は、極めて重要である。スアリーネース、ヌイトーネース、その他の諸部族についての言及自体にも、リアリティーを付与するからである。そして、その諸部族の一つ、エウドセースが、ジュートとの関連性を指摘されているのである。

次に、カエサルのエウドゥスイーとタキトゥスのエウドセースの言及をめぐって、どのように研究者の論述が展開されているか、重要ないくつかの見解を中心に、通時的に見ることにしたい。その際に、ジュートに関連する記述が見出される、後代のいくつかの文献と、それについての研究者の見解も、併せて考えることにしたい。

(三)

20世紀初頭に、中世初期の英国史について、重要な著作を著わしたH.M.チャドウィックは、その中で、ジュートについて言及されているいくつかの文献について、具体的に列挙し、その重要性を吟味している。チャドウィックは、最初に、前述のベータの当該部分の箇所を引用して問題提起をした後に、ジュートについての記述が見出される文献を検討している。チャドウィックは、初期の大陸における歴史関係の文献において、ジュートが言及されているのは、二つしかないとしている⁵⁾。つまり、チャドウィックは、カエサルのエウドゥスイーについても、タキトゥスのエウドセースについても、ジュートと関連

させて論じてはいない。

チャドウィックは、しかしながら、カエサルとタキトゥスに言及し、カエサルのエウドゥスイー、タキトゥスのエウドゥスイーのいずれについても触れている⁽⁶⁾。チャドウィックは、本稿でも引用した、タキトゥスのエウドセスについての当該部分の記述を引用しているが、レウディーグニー、ヌイトーネース、そして、エウドセスは、十分な説明のなされて来なかった部族であると、また、チャドウィックは、ツォイスを引用しながら、エウドセスについて、そのカエサルのエウドゥスイーにも触れている。つまり、カエサルの『ガリア戦記』で言及されている、セドゥスイー *Sedusii* は、オロシウスの記述によれば、*Eduses*, *Edures*, *Edures* という表記があり、それらの表記とタキトゥスのエウドゥスイーとの関連性を指摘しているのである⁽⁷⁾。ここでは、カエサルのエウドゥスイーについても、タキトゥスのエウドセスについても、ジュートとの関連においては論じられていないが、ツォイス、そしてチャドウィックの、オロシウスの記述を通しての、カエサルのエウドゥスイーとタキトゥスのエウドゥスイーの関連性についての指摘は重要であり、それは後に触れるシュヴァルツによって受け継がれてゆくことになる。

前述のように、チャドウィックが、その中にジュートが言及されているとしているのは、次の二つの文献の中の表記である。一つは、ウェナンティウス・フォルトゥナトゥス *Venantius Fortunatus* という、フランク王国の詩人による540年頃に見出される作品の表現の中の *Euthio* という表記であり⁽⁸⁾、もう一つは、フランク王国国王のテウデベルトの、東ローマ皇帝ユスティニアヌスへの書簡の中に見出される、*Saxonibus Euciis* という表現である⁽⁹⁾。チャドウィックは、後者の表現の中の、*Euciis* は *Eutiis* であると解釈し、それがジュートと関連する部族名であるとしている。チャドウィックは、その二つの文献を並列的に論じ、ジュートに言及している大陸の初期の文献は、その二つだけであると強調しているが、一方チャドウィックは、その二つの文献を通して、ジュートの居住地についての考察を示している。まず、前者の *Venantius Fortunatus* の *Euthio* について、その表現された記述内容が、決して、ジュートの居住地についての直接的な言明ではないとしても、ジュートすなわち *Euthio* が、デーン *Danu* とサクソン *Saxo* の間に表記されていることから、

ジュートが、ユトランドに居住していたことを示唆する表記であるとしている。また、後者のテウデベルトのSaxonibus Euciisについては、ジュートすなわち Eutiis（主格はEutii）が、フランク国王への恭順の意を示す内容となっているので、それがユトランドのジュートとは考えがたく、その時期にジュートは、フランク王国の領域近くに居住していたとする。チャドウィックは、ジュートが、ユトランド半島と、フランク王国の領域近くのネーデルランドの両方に居住していたと考えているが、ブリテン島に渡ったのは、故地であるユトランド半島のジュートであるとしている。その点については、あらためて触れることになるであろう。

ホジキンは、中世初期における英国の膨大な通史の著作の中で、ブリテン島におけるゲルマン人諸部族についてのローマ人著述家の言及を、タキトゥスの『ゲルマーニア』から始めている。カエサルのエウドゥスイイーについては、全く言及していない。ホジキンは、タキトゥスの『ゲルマーニア』のエウドゥセスについて、それが恐らくジュートであろうと述べている⁽¹⁰⁾

ところで、5世紀の東ローマのプロコピオスは、ブリテン島における居住民族について、アングル、ブリトン、フリージアンとしていた⁽¹¹⁾。その三つの民族もしくは部族については、様々な解釈が存在しているが、ホジキンは、そこで言及されているアングルは、アングルとサクソンのいずれをも含み、またフリージアンは、ジュートであるとしている⁽¹²⁾。ホジキンは、考古学上の出土品によってジュートの、ユトランドにおける居住の証拠は見出せないとしながらも、ユトランドにおけるジュートの定住の根拠を示すものとして、前述のフランク王国の詩人、フォルトゥナートゥスによる記述の重要性を指摘している⁽¹³⁾。そのフランク人の記述の、エウティオーネスEuthionesというゲルマン人部族が居住していたという言及について、ホジキンは、チャドウィックと同じように、サクソンとデーンの間にそのゲルマン人が記述されている点を重視し、その記述がジュートの居住地の位置を示しているものと捉えている。そしてその記述を、恐らく5世紀にユトランド半島がデーンによって支配されるまで、ユトランド半島に居住していたジュートが存在し、そのことにより、その半島にユトランドという名前を残しているということ、そしてデーンのユトランド半島への移動の後、そのジュートが、ユトランド半島に居住し続けていたとい

うことを示唆しているものとする。

一方で、ホジキンは、チャドウィックやステントンの言及している、フランクの国王テウデベルトの東ローマ皇帝ユスティニアヌスへの540年頃の手紙についても、その重要性に関して注意を喚起している⁽¹⁴⁾。チャドウィックのように、その手紙の中の、Saxones Eucii（文中においてはCum Saxonibus Eucii）という表現の中の、Euciiという語が、Eutiiの誤りであって、それがベーダのJutaeと、同義の部族名であると考えられるとし、従って、それがジュートであるとしている。

次に、コリンウッドとマイヤーズについて、その記述を考えることにしたい。コリンウッドとマイヤーズは、ジュートについては困難な問題が含まれているとし、タキトゥスのエウドセウスが、その名称においても、その地理的な位置においても、ベーダに見出されるジュートであり、それはあくまで仮説であるが、その仮説を立てることが議論の出発点であるとしている⁽¹⁵⁾。また、コリンウッドとマイヤーズは、ジュートは、ブリテン島への移住の時期には、その大部分が、既にユトランド半島には居住していなかったとし、そしてそのことを裏付ける資料として、既に言及した二つの文献、即ち、フォルトゥナートゥスとテウデベルトの中の記述を挙げている⁽¹⁶⁾。

ところで、コリンウッドとマイヤーズは、フォルトゥナートゥスの記述について、前述のホジキンの見解に異論を唱えている⁽¹⁷⁾。つまり、ホジキンは、フォルトゥナートゥスの記述で、Euthionesが、デーンとサクソンの間に言及されているのは、Euthiones、即ちジュートが、ユトランド半島に居住していることの現われであるとしていたのであるが、コリンウッドとマイヤーズは、その、諸部族の列挙の順序は、単に、その詩のhexameter六歩格の構成上によるもので、地理的な居住地域を表わすものではないとする。そしてジュートの記述について、大陸のサクソンとの関係の深さを示すものと述べている。その点を少し考えてみたい。

コリンウッドとマイヤーズの、フォルトゥナートゥスの記述についての、前述のホジキンの見解について提示した疑問は、ホジキンの前に、同じような見解を示していたチャドウィックに対するものでもある。しかしながら、コリンウッドとマイヤーズは、フォルトゥナートゥスの記述について言及する際に、

その記述が、ジュートのユトランドに既に居住していないことを示す資料として言及しているのである。つまり、そこには、コリンウッドとマイヤーズの、ジュートの居住地域に関する意識があらかじめ内包された上での、その文献の提示とすることができる。その文献のジュートに関連した部分が、hexameterの基準で記述されているので、ジュートのユトランドの居住を示すものでないとするのであれば、同じ理由で、その部分は、サクソンとの関係の深さを示す記述ではない、ということになるであろう。筆者は、その記述が地理的な内容を含んでいるか否かについては、判断が困難である。ただ言い得るのは、それが、西暦540年頃、大陸にジュートがいたことを示す極めて重要な記述であるのは、コリンウッドとマイヤーズの、その記述がジュートとサクソンの関係の深さを示すものである故ではなく、もう一つの文献である、テウデベルトの手紙の中に現われるジュートの記述を補完するものである故と考えたい。一方、コリンウッドとマイヤーズは、テウデベルトの記述についても、同じように、大陸におけるジュートとサクソンとの関係の深さを表わしているとするのであるが。筆者は、コリンウッドとマイヤーズの、ジュートが、既にゲルマン民族の大移動の時代以前に、ユトランド半島にはその大部分が居住していなかったとする点には共鳴しつつも、コリンウッドとマイヤーズのその説の延長として、ジュートの大陸内の移住地域についての言及を求めたい。それは、サクソンとの深い関係を示す地域というよりは、恐らくはフリースランとの、そして結局は、テウデベルトの記述にあるように、フランクとの深い関係を示す地域と言い得るのではないだろうか。その問題は、あらためて後で触れることになるであろう。ちなみにホジキンは、コリンウッドとマイヤーズの指摘、即ち、部族名の語順が必ずしも地理的な位置を示しているのではなく、hexameter によるという指摘について、それが恐らく正しい指摘であろうと述べている⁽¹⁸⁾。しかしホジキンは、コリンウッドとマイヤーズの、その記述がジュートとサクソンの関係の深さを示すものであるという見解には、触れていない。

また、コリンウッドとマイヤーズは、ベーダのジュートについての記述について、結局タキトゥスのエウドセースについての言及には、北ドイツの、川と森に守られて、海の近くにある、という漠然とした記述のみしか見出されず、

居住地域についての言及が見出されないので、ベーダは、そのタキトゥスの記述をもとにして、ジュートのあり得べき故地を推察したのでであろうと述べている⁽¹⁹⁾。コリンウッドとマイヤーズは、カエサルのエウドゥスイーには全く触れていない。

英国史について大部の通史を著わしたステントンは、タキトゥスの『ゲルマーニア』の中で、アングルについては明瞭に言及されているのに対して、ジュートとサクソンについては、言及されていないと述べている⁽²⁰⁾。つまり、ステントンは、タキトゥスの言及しているエウドセスについて、それがジュートと関連のある部族であるとはしていない。またステントンは、『ガリア戦記』のエウドゥスイーについても全く触れず、そのエウドゥスイーが後のジュートであるとは考えていない。ステントンは、ベーダの『英国国民教会史』の中のジュートについて、その実体の把握の可能性に大変否定的であり、ジュートが、大陸の多くの記述家によっても言及されていない部族としている。エウドゥスイーとエウドセスについて、ジュートとの関連性が全く指摘されていないのは不思議である。

ところで、ステントンは、前述の、西暦540年頃の、フランク王国の国王テウドベルトによる、東ローマ皇帝ユスティニアヌス宛に送った手紙について言及している⁽²¹⁾。その手紙の中の、Saxones Euciiという表現については、既にチャドウィックをはじめ、ホジキンが述べていたように、また、コリンウッドとマイヤーズが、チャドウィックやホジキンの解釈には触れてはいないがその解釈を前提として論述していたように、ステントンも、それをEutiiであるとし、ジュートとの関連性を示唆する表記と考えている。しかしながら、ステントンは、それが恐らくジュートであろうとしながらも、その文書はジュートの実体について、知らしめるところを何も持たないものとしている。チャドウィックが推測し、またホジキンも指摘しているように、その文書は、ジュートの居住地域を示す上で、重要な文書であると考えられるのであるが、それについては、後で触れることになるであろう。

ステントンはまた、前述の、西暦600年頃のフランク人の詩人によって言及されているゲルマン人についても触れている⁽²²⁾。そこに見出される、エウティオーネスEuthionesという部族が、デーンとサクソンの間に居住しているとい

う内容の記述について、ステントンは、そのエウティオーネスをジュートと関連性のある部族としているが、その文書が、ジュートの実体を知る上で、何も明らかにしないとされている。その文献は、前述のように、フリージアン、フランクとの関係で、ジュートについて大変重要な意味を持つものと思われるのであるけれども、その点についても後述することになるであろう。

シュヴァルツは、ゲルマン民族の歴史に関する重要な著作の中で、カエサルの『ガリア戦記』の中のエウドゥスイー、そして、タキトゥスの『ゲルマニア』の中のエウドセースを、ジュートと関連する部族であると見なしている⁽²³⁾。しかしながら、シュヴァルツは、エウドゥスイーそしてエウドセースが、ジュートと関連性を持つ部族であるとは見なしていても、ジュートがエウドゥスイー、そしてエウドセースの、直接の後裔であるとはしていない。シュヴァルツがエウドゥスイーの直接的な後裔としているのは、ユートウンゲン Juthungen というゲルマン人部族である⁽²⁴⁾。つまり、ジュートではなくユートウンゲンが、その双方の直接的な後裔であり、ジュート（ユート Jute）は、ユートウンゲンに関連しているが、ユートウンゲンの後にユトランドに移住して、その名前をユトランド半島に残した部族であるとする。

シュヴァルツは、ユートウンゲンとエウドセースの関係について、その文献上の根拠として、プトレマイオスによる記述を挙げている⁽²⁵⁾。それは、ユトランド半島のハルデーデンの居住地域の東、カエサルそしてタキトゥスにも言及されている、古くからのゲルマン人部族キンブリーの、さらに北に居住していたゲルマン人についての記述であり、タキトゥスのエウドセースの記述と重なる内容となっている。シュヴァルツの説を敷衍すれば、次のようになるであろう。すなわち、ユートウンゲンは、ジュートと関連を持つ同族のゲルマン人であるが、同一の部族ではない；ユートウンゲンは、ジュートとのユトランド半島への移住以前に既にユトランドからの移住を始め、カエサルの時代には、既に移住していたユートウンゲンが、ライン川沿岸のエウドゥスイーとして、またタキトゥスの時代には、故地であるユトランド半島に居住し続けていたユートウンゲンが、エウドセースとして言及され、その後、3世紀から5世紀にかけてローマの文献に現われ、その後、アレマンネン Alemannen と同盟関係にあったが、アレマンネンの滅亡時にアレマンネンとともに滅亡する⁽²⁶⁾。つまり、

シュヴァルツは、ユートウンゲンとジュートを関係の深い部族であるとしつつも、その大陸における居住地域と移動の時代がそれぞれ異なる部族とし、ブリテン島に渡ったのは、後にユトランドへ移住し、そしてそこから、ライン川流域に移住していたジュートであると考え⁽²⁷⁾、ユートウンゲンは、アレマンネンに合流し、ブリテン島には移住しなかったとするのである。

旧東ドイツの研究者に、ゲルマン人の諸部族についての全般的な歴史について、様々な優れた論考が見出される。まず、B. シュミットは、カエサルの『ガリア戦記』の写本の中のSedusios (Sedusii) に言及し、それはEudusios (Eudusii) であるとして、ジュートであるとしている。それは、これまで述べてきたチャドウィック、ホジキン、シュヴァルツ等と共通する見解である。また、B. シュミットは、シュヴァルツによる、アレマンネンに合流したユートウンゲンを、Eudusiiの後裔であるという指摘には、様々な考古学上の出土品をもとに、疑問を提示している⁽²⁸⁾。一方、ロイベは、タキトゥスの『ゲルマーニア』のエウドセースをジュートであると特定し、さらにL. シュミットを引用しながら、タキトゥス以降の文献のジュートと思われる部族名の出典を具体的に列挙している⁽²⁹⁾。ロイベは、タキトゥスのエウドセースには言及しているが、カエサルの『ガリア戦記』のエウドゥスイーには言及していない。

以上、カエサルの『ガリア戦記』、タキトゥスの『ゲルマーニア』、そして、ウェナンティウス・フォルトゥナトゥスとテウデベルトの記述の中に見出される、ジュートと関連すると思われるゲルマン人部族について、研究者の見解を吟味してきた。その様々な見解についての判断は、結語の項に譲ることにして、結局カエサルから始まるそれらの文献の延長上に、8世紀のペーダの、冒頭近くに引用した、極めて明快な、ジュートの故地についての記述があるわけである。

次の項の前に、この項でしばしば触れることになった、カエサルの『ガリア戦記』の中のエウドゥスイーというゲルマン人部族が、ジュートと結びつけて論じられることが比較的少ない事実について考えることにしたい。

『ガリア戦記』のエウドゥスイーが、ジュートと関連させて論じられることが比較的少ないのは、その写本上の問題によるものと思われる。その点について、前述のように、ツォイスそしてチャドウィックが示唆していたのである

が、その観点をシュヴァルツが受け継ぎ、発展させ、説得力のある論述を展開したのであった。『ガリア戦記』の写本の中で、エウドゥスイーEudusiiを、Sedusiiとしている写本が存在しており、これまでその写本が重要視されてきたために、その写本の中のSedusiiについて問題が指摘されることはなく、当該部族がセドゥスイーSedusiiとして認識されてきた。しかしながら、一方で、ローマの歴史家のオロシウスは、『ガリア戦記』の中のその当該部族についての記述の際に、Edusesとしている。シュヴァルツは、オロシウスによる写本の判断を正しいものと指摘し、またオロシウスの記述のEdusesについては、Eudusiiとされるべきものとしている⁽³⁰⁾。シュヴァルツの指摘のように、当該部族に関しては、オロシウスの写本の選択が、正しい認識の現われであり、またそれは、その写本によればEudusiiである。そしてそのEudusiiが、本稿のジュートと関連性を持つと思われる部族名となるのである。

次に、歴史的な著述ではないが、その中に重要な歴史的事実についての記述が含まれていると推測される、古期英語で書かれた二つの詩、『ウィードスイース』Widsithと、『ベオウルフ』Beowulfの中の、ジュートと関連すると思われるゲルマン人部族についての言及を通して、ジュートの大陸における故地と居住地、そして移動の軌跡を考えてみたい。

(四)

古期英語の詩、『ウィードスイース』⁽³¹⁾と『ベオウルフ』⁽³²⁾は、前者が40行ほど、そして後者が3000行ほどと、行数は異なっているが、その二つの詩の中に、とりわけゲルマン人の歴史について重要な内容が含まれている。虚構の作品の中に、重要な歴史的事実が述べられていて、その中に、本稿と関連するジュートについての記述も見出されるのである。その部分について考えてみたい。

『ウィードスイース』は、ウィードスイースという名前のゲルマン人の詩人が、世界の様々な国の国王を訪問する時の記録になっている。詩人が、祖国であるミュルギングスを離れ、特にゲルマン人諸国家の国王を訪問し、その中に、4世紀後半の東ゴート王国の国王エオルマンリーチ、6世紀後半のランゴバルト王国の国王アルポイン、等、時代は異なるが、実在の国家と人物が、登場し

ている。その中に、ジュートが言及されているのである。

その、ジュートは、『ウィードスイース』では、ユーターンとして登場している⁽³³⁾。そしてそのユーターンは、4行の間に、フランク、ユーターン、そしてフレーザン（フリージア）と連記されている⁽³⁴⁾。フレーザンは、アングル、サクソン、ジュートとともに、その一部がブリテン島に移住したとも言われている、ゲルマン人のフリージアン国家である。『ベーオウルフ』と同じく、頭韻詩である『ウィードスイース』では、各行のそれぞれの語の構成は、頭韻によって限定されている。一方で、『ウィードスイース』では、詩人の訪れる国家は、地理的に互いに隣接している場合が多い。例えば、アングルとスエービー、フランクとフリージア、スウェーデンとイエーアタスというふうに、それぞれ隣接した国々が続けて記されている⁽³⁵⁾。ユーターンの場合も、上のように、フランク、フレーザンの間に用いられているのは、単に、頭韻のみによって限定されているのではなく、その地理的関係の近さも示していると言い得る。そして、ユーターン、即ちジュートが、フランクとフリージアの間にいる状況は、次の『ベーオウルフ』の状況とも共通している。つまり、ジュートが、ユトランド半島ではなく、フランクとフリージアの近隣地域、恐らくはライン川西岸下流域に居住していることを示しているものと推測し得るのである。

一方、『ベーオウルフ』は、アングルの詩人の作とされているが、デネとイエーアタスという二つの国家を舞台にして展開される物語である。そして、デネ、イエーアタスという二つのゲルマン人国家のほかに、いくつかのゲルマン人国家とゲルマン人が登場している。その中に、本稿のジュートと関連すると思われるゲルマン人が、登場しているのである。具体的には、主人公ベーオウルフが、デネを訪れ、怪獣グレンデルの襲来を退けた後に、デネの国王フロースガールの主催による祝宴で宮廷詩人によって語られた挿話の中に言及されている⁽³⁶⁾。その挿話は、「フィン王の挿話」として知られているもので、上の『ウィードスイース』にも言及されている、ゲルマン人の国家フレーザンの国王フィン王についての挿話である。その国王フィンをめぐる挿話自体については、ここでは触れないが、そこにエーオタンEotanというゲルマン人が言及されていて、そのエーオタンが、ジュートと関連すると思われるゲルマン人である。そこでは、エーオタンはその挿話の文脈の中で、あたかもフレーザンと同

じゲルマン人であるかのように用いられている。

エーオタンについては、音韻面からジュートであるという指摘が多い⁽³⁷⁾。フィン王の挿話の中で、エーオタンが、フレーザンと同じ地域に居住しているように記されているのは、フレーザン、即ちフリージアン⁽³⁸⁾の領域内に、エーオタン、即ちジュートの居住地域があったからと推測され得る⁽³⁸⁾。その場合、ジュートが、ユトランドではなく、フリージアンの居住地域、即ち、ライン川下流域に居住していたということになる。

『ウィードスイース』のユーターンも、『ペーオウルフ』のエーオタンも、そのジュートであるという点について、ほぼ研究者の見解は一致している。ただ、ユーターンとエーオタンの記述を、ジュートの居住地域、そして移動の軌跡と関連させて論じている議論は少ない。

(五)

これまで、ベータの『英国民教会史』のジュートについての記述を出発点として、カエサルの『ガリア戦記』のエウドゥスイー、タキトゥスの『ゲルマーニア』のエウドセス、そして、ウェナンティウス・フォルトゥナトゥスとテウデベルトにあらわれるジュートと関連すると思われるゲルマン人について、研究者の様々な見解を見て来た。また、古期英語の詩の、『ウィードスイース』、『ペーオウルフ』についても、そこで言及されている、ジュートと関連すると思われる、ユーターン、エーオタンについて、それぞれ触れて来た。ここで、様々な文献や研究者の見解をもとに、ジュートの故地と居住地域、そしてその移動の軌跡について、あり得べき仮説の可能性を追求してみたい。

まず、ジュートの故地についてであるが、それが、ユトランドであるという点については、多くの研究者の見解は共通している。それは、ユトランドという地名とジュート（ユート）との関連性から、確言され得る。ところが、ユトランドのジュートが、カエサル、タキトゥスと結びつけて論じられることは少ない。ステントンのように、タキトゥスにも、カエサルにも言及されていないという説をはじめとして、とりわけカエサルのエウドゥスイーと関連させて論じられている場合はまれであり、わずかに、シュヴァルツとB. シュミットにおいて、その関連性が論じられている。しかしながらシュヴァルツの場合は、

カエサルのエウドゥスイーと直接関係しているのは、ジュートの同族のユートウンゲンであり、ジュートは後にユトランドに移住したゲルマン人であるとする。それに対し、B. シュミットは、ジュートがカエサルのエウドゥスイーの直接の後裔であるとする。シュヴァルツの説は、結局、ジュートはカエサルにもタキトゥスにも言及されていないゲルマン人であるということになる。ジュートのユトランドにおける居住については、ホジキンの言うように、考古学的に、その定住の確証が得られているわけではないとしても、一方、シュヴァルツのユートウンゲンの場合も、B. シュミットの述べているように、その居住の軌跡を考古学的に確証されるまでには至っていない。ここでは文献的に仮説を追求し得るか、その可能性を考えているわけである。シュヴァルツのユートウンゲンは、カエサルのエウドゥスイーには、その居住地域が近いとは言えるかも知れないが、カエサルの後代のタキトゥスのエウドゥセスについては、そのユトランドの居住についての説明が見出されない。そして、そもそも、そのユートウンゲンとジュートが同族ではあるが、別の部族で、移動の時期を異にするという説は、それを跡付けるものはない。そのユートウンゲンもともとユトランド起源となるであろうが、カエサルの軍隊と戦ったユートウンゲンが、ライン川の流域に居住し続け、一方タキトゥスのエウドゥセスは、故地に残っていたユートウンゲンであるとすることはできよう。その場合、タキトゥスのユートウンゲンが、後代のジュートとどのように接触するのかについて、追求が困難である。B. シュミットのように、カエサルのエウドゥスイーが、ジュートであったとするほうが自然であろう。また、タキトゥスのエウドゥセスについては、おおむね諸研究者の見解は、それがジュートであるという点について一致している。それでは、そのタキトゥスのエウドゥセスの、カエサルのエウドゥスイーとの関係であるが、それについての言及は、B. シュミットにも見出せない。上記のシュヴァルツのユートウンゲンの場合に少し触れたが、その状況は、ジュートの場合に、より適合するものと思われる。つまり、もともとユトランドにジュートは居住していたのであるが、カエサルの時代に、ユトランドから一部がライン川流域に移住していた。そのジュートが、カエサルの軍隊と戦ったエウドゥスイーで、一方故地に残り居住し続けていたジュートがいて、それがタキトゥスに言及されているエウド

セースである。そのエウドセースは、アングルと共に、ユトランド半島に居住していたことが、タキトゥスの記述からも推測され得る。そしてそのジュートとアングルが、ブリテン島に移住することになるのである。

ウェナンティウス・フォルトゥナートゥスとテウデベルトの記述については、前者の記述は、ジュートの居住地域について、必ずしも明らかにするものではないかも知れない。一方、後者の記述については、それが、ジュートとフランクの深い関係を示している文献であることは確かである。恐らくはその文献以前から、ジュートは、既にフランクと近い関係になっていたものと推測される。そのしてそのことは、古期英語の『ウィードスイース』と『ペーオウルフ』の記述と関連を持つものと思われる。

『ウィードスイース』と『ペーオウルフ』に現われるジュートは、いずれもフリージアンと関係している。『ペーオウルフ』の場合は、ジュートとフリージアンは同義として用いられているほどであり、そこからジュートのフリージアンの領内における居住の状況が窺われる。『ウィードスイース』からは、ジュートの、フリージアン、フランクとの地理的な近さを窺える。それは、テウデベルトの記述の前段階の状況を彷彿させるものがある。後にジュートはブリテン島に移住し、そしてその後フランクとの関係の深さが示されるのであるが、『ペーオウルフ』で示されているのはフリージアンとの関係である。ジュートは、『ペーオウルフ』のフレイザンのフィン王の時代から、フランクのテウデベルトの時代までに、フリージアンからフランクへ、その関係の重要性を変化させていると考えられる。いずれにせよ重要であるのは、ジュートの、フリージア、そしてその後のフランクの近隣における居住の事実である。

以上、これまで述べてきた内容を総合すれば、ジュートの故地、居住地域そして移動の軌跡は、次のようになるであろう。ジュートは、ユトランドの故地から、一部がライン川流域に移住し、カエサルの時代に『ガリア戦記』に見出される。カエサルの軍隊に敗北したジュートは、ライン川の下流域に退いていったであろう。そしてそこは古くからのフリージアンの地域である。一方、ユトランド半島に居住し続けていたジュートは、タキトゥスの『ゲルマニア』にもその記述が見出される。やがて、ゲルマン民族の大移動の時期に、あるいはそれ以前から、フリージアンの地域に移住し、既に移動していたジュートと

合流する。それが、『ウィードスイース』、そして『ベーオウルフ』に言及されているジュートであろう。そしてそのジュートは、やがてフランクとの関係を強めるようになり、最終的にテウデベルトの手紙に現われる状況となる。その時は、既にジュートは、ブリテン島に渡って、ケント王国を作っているわけであるが。ブリテン島に渡ったジュートは、前述のベータに、ヘンギストとホルサという名前が最初の首長として言及されている⁽³⁹⁾。そのヘンギストとの関連を指摘されている人物が、『ベーオウルフ』のフィン王の挿話にも登場している⁽⁴⁰⁾。そのヘンギストについては、稿を改めて論じることとするが、いずれにせよジュートは、故地のユトランド半島から、フリージアの地域に移住し、そしてフランクとの関係も深めながらブリテン島に移住し、アングロ・サクソン七王国の最初の隆盛を見出したケント王国を建国したのである。ベータの記述に、ジュートのもともとの居住地域をユトランドと思われる地域にしているのは、故地の記述としてはあくまで正確である。そこにはジュートの移動の軌跡についての記述がなく、研究者のベータへの批判がなされる余地もあるのであるが、もとより、ベータには、ジュートの移動の過程を記述する際に依拠する文献は存在していなかったのである。

[注]

- (1) Beda (Bede), *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*. *Venerable Baedae Opera Historica*, ed. Plummer, C., 2 vols., Oxford, 1896; *Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed. and trans. J.E.King, Loeb, 2 vols., London and Cambridge, Massachusetts, 1930; *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch. Plummer, Oxford, 1956. 邦訳：長友栄三郎訳、『イギリス教会史』, 創文社, 1971年。『尊者ベータの英国民教会史』, 第1巻, 第15章。
- (2) Caesar (Gaius Iulius Caesar), *Commentarii de bello Gallico*, ed. G. Dorminger, 2. Auflage, München, 1966. 邦訳：カエサル著, 近山金次訳, 『ガリア戦記』, 岩波書店, 1942年。カエサル, 『ガリア戦記』, I - 51。
- (3) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938; *Die Germania des Tacitus*, erläutert von Rudolf Much,

ditte, beträchtlich erweiterte Auflage unter Mitarbeit von Herbert Jankuhn, herausgegeben von Wolfgang Lange, Carl Winter · Universitätsverlag, Heidelberg, 1967. 邦訳：タキトウス著，泉井久之助訳，（改訳）『ゲルマーニア』，岩波書店，1979年。タキトウス，『ゲルマーニア』，40。

- (4) タキトウス，『ゲルマーニア』，2。
- (5) Chadwick, H. M., *The Origin of the English Nation*, Cambridge University Press, 1907, p. 107.
- (6) *ibid.*, p. 198.
- (7) *ibid.*, p. 198, fn.
- (8) Venantius Fortunatus, *Carminum, epistularum, expositionum, libri* X I, ed. F. Leo, *MGH, AA*, IV, 1, 1881, ix. i. 73. Cf. Chadwick, H. M., *ibid.*, pp. 97-98.
- (9) Bouquet, *Rerum Gallicarum Scriptores*, iv, 59. Cf. Chadwick, H. M., *ibid.*, p. 107.
- (10) Hodgkin, R. H., *A History of the Anglo-Saxons*, 3rd ed., vol I., Oxford University Press, 1952, p. 4.
- (11) Procopius, *De bello Vandalico, De Bello Gothico*, etc., ed. and trans. H. B. Dewing, *Loeb*, 7 vols., London and New York, 1914-40, IV, 9; *De bello Gothico*, in *Procopii Caesariensis opera omnia* II, ed. J. Haury, Leipzig, 1963.
- (12) Hodgkin, R. H., *op. cit.*, p. 82.
- (13) *ibid.*, pp. 82-83.
- (14) *ibid.*, p. 82.
- (15) Collington, R. G. and Myres, J. N. L., *Roman Britain and the English Settlements*, 2nd ed., Oxford University Press, 1937, p. 345.
- (16) *ibid.*, p. 345.
- (17) *ibid.*, p. 345, fn.
- (18) Hodgkin, R. H., *op. cit.*, Note. 8., p. 371.
- (19) Collington, R. G. and Myres, J. N. L., *op. cit.*, p. 338.
- (20) Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, 2nd ed., Oxford University Press, 1947, p. 12.

- (21) *ibid.*, p. 14.
- (22) *ibid.*, p. 15.
- (23) Schwarz, E., *Germanische Stammeskunde*, Carl Winter · Universitätsverlag, Heidelberg, 1956, pp. 115 – 116.
- (24) Schwarz, E., *ibid.*, pp. ; Schwarz, E. (hrsg.), *Zur Germanischen Stammeskunde*, aufsatze zum neuen Forschungsstand, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1972, pp. 217 – 222.
- (25) Schwarz, E., *op. cit.*, p. 115 – 116.
- (26) Schwarz, E. (hrsg.), *op. cit.*, pp. 217 – 228.
- (27) Schwarz, E., *op. cit.*, pp. 115 – 116.
- (28) Schmidt, B., *Die Germanen*, Band II, (hrsg. von Herrmann), 2 durchgesehene Auflage, Akademie – Verlag, Berlin, 1986, p. 337.
- (29) Leube, A., *Die Germanen*, (hrsg. von Herrmann, J.), Band II, 2 durchgesehene Auflage, Akademie – Verlag, Berlin, 1986, p. 453.
- (30) Schwarz, E., *op. cit.*, p. 115.
- (31) Krapp, J. P. and Dobbie, E. v. K., ed., *Widsith: The Exeter Book*, Columbia University Press, 1936.
- (32) Klaeber, Fr., ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.
- (33) Krapp, J. P. and Dobbie, E. v. K., ed., *op. cit.*, l. 26.
- (34) *ibid.*, ll. 24 – 27.
- (35) *ibid.*, l. 61, l. 68, l. 58.
- (36) Klaeber, Fr., ed., *op. cit.*, ll. 1072, 1088, 1141, 1145.
- (37) Chambers, R. W., *Beowulf—an Introduction to the Study of the Poem*, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, pp. 245 – 289. Klaeber, Fr., ed., *ibid.*, p. 233, fn. 3.
- (38) 厨川文夫, 『厨川文夫著作集・上』, 1981年, 金星堂, 472頁, 「ベーオウルフ」訳注, エーオタンの項。
- (39) ベーダ, 前掲書, 第1巻, 第15章。
- (40) Klaeber, Fr., ed., *op. cit.*, lines 1071 – 1159.

The Jutes, The Traces of Their Migration from the Homeland : The National Background of the Anglo-Saxon Kingdoms in the Early Middle Ages (2)

Michio IWAYA

The Jutes are known as one of the Germanic tribes who migrated to Britain and established the English language and several kingdoms in the early Middle Ages. According to Bede, who wrote about the national history of Britain in the first half of the 8th century, the Jutes are to have come from Jutland in today's Denmark. Several continental records, however, have suggested that several centuries before that a Germanic tribe, who seemingly had close relations or kinship to them, dwelled in the province of the Frisians or the Franks. On the other hand, historical works by Romans, such as Caesar and Tacitus, had already made reference to a Germanic tribe who might have been their ancestors. In medieval poetical works like *Widsith* and *Beowulf* written in Old English, can we find also what the Jutes used to be. Because of the shortage of written records and other archaeological sources it is very difficult to trace their history to their origin and so there are differing views and conjectures about it. The aim of this paper is to survey the historical works and modern research concerning the Jutes and to seek for traces of their migration from their continental homeland to Britain.